
「届けたい想い」FF?/ティユウ

深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「届けたい想い」FF？/ティユウ

【Nコード】

N6769A

【作者名】

深海

【あらすじ】

前回投稿した物を、読んでくださった方々の意見を読んで加筆修正してみました。よくなってるといいんですが……。

月明かりが水面に乱反射し、とても幻想的な輝きを放つ。真っ暗な辺りに、その湖は浮かび上がって見えた。その畔にしゃがみこんでいたユウナは思い詰めた表情をしていて、何か考え込んでいるようだ。

「ユウナ」

声をかけられユウナが振り返ると、優しく微笑むティードがいた。ユウナも微笑み返したつもりだが、僅かに口角を吊り上げただけだった。

「とうとう……だな」

「そうだね……終わらせなきゃ」

ユウナは隣に立つティードを見上げ眉尻を下げた。

「ユウナ！」

「えっ……きゃあっ！」

突然ティーダがユウナの腕を掴み、引つ張り立たせる。困惑するユウナに、まるで悪戯っ子のような笑みを見せたティーダは、ユウナ共々湖に飛込んだ。

水面から顔を出したユウナに少し遅れてティーダも顔を出す。ユウナのこわばった表情を見てティーダの顔からはだんだんと笑顔が消えていき、ティーダの手がユウナの頬に伸びて張り付く髪をかき上げた。

二人とも湖と同じく水に濡れ、月明かりに照らされキラキラと光る。

「ユウナ……笑って？」

「でも……」

ティーダの唇がそつとユウナの唇に重なる。驚き身を固くするユウナ。だが、徐々に体の力を抜いていき、ティーダの首に手を回した。冷たい水の中で唯一、暖かい体。熱いとさえ思ってしまう唇。

少しずつ水によって奪われていく体温をそこから熱を得ようと、互いにむさぼりあう。

だがその口付けはとても優しいものだった。

「また一緒にここに来ようね?」

「うん」

「君のザナルカンドに行きたいブリッツの試合特等席、用意してくれるよね?」

「うん」

笑顔で言葉を紡ぐユウナの瞳から一筋の涙が溢れる。ティードはその涙を拭くと、あやすようにユウナの背を叩く。

「いろんな所に連れて行ってくれる? もっと……もっと、もっと……ずっと一緒にいたいよ……」

「うん」

「 嘘つき……」

なぜだろうね。

あの時、君が遠くに行ってしまうってなんとなくわかってたんだ。だから君を困らせるような我が儘をいっぱい言った。

あの時、涙を拭ってくれた君の手の温かさ、今でもはっきり覚えている。

あの唇の熱さも……。

「ティーダッ……！」

「ユウナ……」

気付いた時、君は消えかかっている。
もう触れることができない。

「嫌だよ……」

「ごめんな……約束、守ってやれなくて」

「嫌だよ！」

せめて君をちゃんと見たいのに、涙が邪魔してた。

「俺……ユウナのこと好きだったから！」

「過去系でなんか言わないで……ずっと一緒にいたいってうんって言ったのに……！」

悲しそうに、だけど優しく微笑んだのが君の最後の姿。

「ティーダ……」

なんで私、笑顔でいられなかったんだろう。
本当……自分が嫌になっちゃうな。
弱い私でごめんね？
でも必ず君に届けるから。
この気持ち、君に必ず。

f
i
n

「大好き」
って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6769a/>

「届けたい想い」FF?/ティユウ

2010年10月11日00時48分発行